

大博物館 だまの

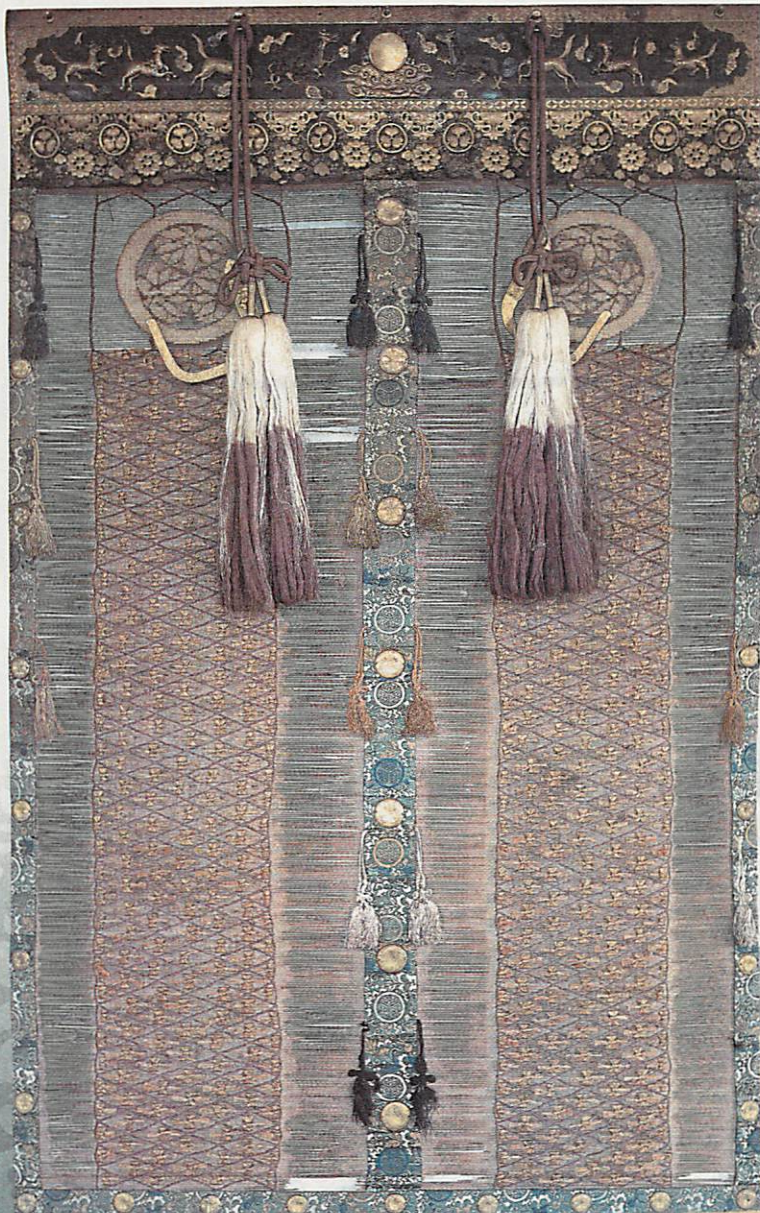
NO. **54**
2007.4

津山郷土博物館

葵紋付簾

三ツ葉葵紋の付いた簾である。この華麗な簾には、享保21年3月の由緒書きが伝えられている。それによると、元は、この簾は江戸城内紅葉山東照宮で用いられていたものらしい。その後、浅草伝法院の僧正に下賜されたが、縁有って美作の地に伝わったということである。豪華絢爛な細工の施された金具等の装飾からは、伝承の正しさが感じられる。

現在は、津山郷土博物館に収められている。



▲葵紋付簾 江戸時代

ごあいさつ

津山郷土博物館館長 佐野 綱由



私こと、湊哲夫の後任といたしまして、平成19年1月1日付けで津山郷土博物館館長を拝命いたしました。

今後とも博物館に課せられた任務の重要性を自覚し、郷土の歴史顕彰に鋭意努力してまいりたいと存じますので、ご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



安東次男の 〈古典評釈〉

津山郷土博物館には、安東次男の芭蕉評釈「霽の巻」「花見の巻」「鶯の羽の巻」「雁がねの巻」の自筆原稿がある。原稿用紙の升目にきちんと書かれた文字は、筆者の厳重な性格がそのまま現れていて、興味深い。

安東次男の文筆活動は、俳句の作句に始まり、詩、版画家との共同作品である詩画集、フランス文学の翻訳・紹介、古陶・古美術の紹介・鑑賞、そして古典の評釈という変遷をたどっているが、今日最も高く評価されているのが、古典評釈、特に芭蕉連句の評釈である。

彼が初めて蕪村について書いたのは昭和35年で、その後書き継いだ文章をまとめて昭和37年に刊行した「澱河歌の周辺」は、読売文学賞を受賞している。このころから彼の古典詩歌の評釈は世間の注目を集め始め、のちに「花づとめ」「百人一首」

「藤原定家」「芭蕉連句評釈」などの文章につながっていく。

彼の評釈は、短い詩句から、中国の古典、陶淵明、杜甫、李白、王維などの詩人たちの詩にまでさかのぼって作品の背景を探り、また、わが国の古典、王朝時代から中世、近世の詩歌、日記、物語、歴史的人物などを渉猟し、史実を踏まえ、字義を追及し、詩心のありどころを解明するもので、本歌取りの評釈には他の追随を許さない独自の展開が見られる。この分野を独立させて一つの作品世界を構築した作家はほかにいないのではないだろうか。

極めつけが「芭蕉連句評釈」で、芭蕉を中心にした蕉風俳句、特に連句を取り上げて、同好の仲間たちとともに「不易流行」を地で行くような丁々発止のやりとりを楽しむ「歌仙を巻く」という文学の形式の面白さ、楽しさを現代人に知らしめた功績は大きい。ただ、この仕事は、彼のように、古今東西の古典を漁りつくし、強靱な思索力、強力な語彙力、そのうえに豊かな想像力と詩心をもって作品化できる力量があってはじめてなしうるものであり、凡庸な余人の真似の出来ることではあるまい。
(佐野綱由)

源氏絵を読む

「扇面源氏物語絵の世界」

●会期／平成19年3月24日(土)～4月22日(日) ●会場／津山郷土博物館

物語文学の傑作である源氏物語が執筆されて以来、数多くの源氏絵が描かれてきました。それらは、美術的な価値を持つだけでなく、物語の絵解きとしての役割も果たしていました。今回の展示でも、王朝の世界を色鮮やかに描く、美しい源氏絵として鑑賞して頂くだけでなく、そこに描かれている源氏物語の内容を読みとることにより、より深く楽しむことができます。

例えば、巻3「空蝉」うつせみの場面を見ましょう。

再度紀伊守邸を訪れた源氏は、空蝉（紀伊守の父親の妻）と軒端菰（紀伊守の妹）が碁を打つ姿を覗き見ます。その後、小君に手引きをさせて、空蝉の寝所に忍び入った源氏は、空蝉に逃げられるのですが、そのまま、まあよかろうとばかりに、そこにいた軒端菰と契

りを交わします。そして、空蝉の脱ぎ残した薄衣を持って帰り、その薄衣とともに寝床に入ります。しかし、なかなか寝付けない源氏は、空蝉に歌を贈るのです。この絵の場面では、その歌が、書き添えられています。



うつせみの
身をかへて
ける
木のもとに
なお人からの
なつかしきかな

歌の内容は、「蝉が抜け殻になって身を変えてしまった木の根本に、なおあの人の抜け殻に忍ばれる人柄が懐かしいことだ」というものです。

ひとつひとつの絵の場面を、じっくりと読み取っていくと、源氏物語の楽しみが更に増していきます。

平成17年度

〈鍬形蕙斎の孫〉

鍬形勝永筆「恵比寿大黒図」を購入

この画幅は平成17年度に購入した鍬形勝永筆「恵比寿大黒図」です。鍬形勝永は幕末の津山藩御用絵師で、「江戸一目図屏風」で有名な鍬形蕙斎の孫に当たります。御用絵師鍬形家は蕙斎が寛政6年（1794）に大役人格御絵師として召抱えられたことから始まり、その後、二代赤子、三代勝永と代々養子で続きました。勝永は通称蕙林、松平越中守の家来岡善三郎の二男で、赤子の長男が嘉永元年（1848）に病死していたため、安政2年（1855）7月18日義父赤子病死の跡を受けて家督を継ぎます。鍬形家は蕙斎以来江戸詰でしたが、明治2年（1869）11月に津山に移住しました。その翌年、勝永は藩に願い出て弟（赤子の二男）に家督を譲り、隠居しています。その勝永筆の画幅が売りに出ているという情報を得たため、津山郷土博物館では、郷土ゆかりの資料として購入いたしました。

このように当館では津山ゆかりの資料について随時、収集・保存に努めています。



■特別展・企画展

企画展「扇面源氏物語絵の世界」

(平成18年度～)

- 会期／平成19年3月24日(土)～4月22日(日)
- 会場／津山郷土博物館 3階

特別展「城下町と酒」

- 会期／平成19年10月6日(土)～11月11日(日)
- 会場／津山郷土博物館 3階

■教育活動

古文書講座

「町奉行日記を読む9」

5月10日(木)～3月13日(木)
全9回(毎月第2木曜日)

夏休み子ども歴史教室

「弥生土器をつくる」

7月20日(金)・8月10日(金)
全2回

文化財めぐり〈友の会〉

5月・9月・11月・3月
全4回

(古代史講座は、今年度はありません)

■調査・研究活動

「城下町と酒」

(特別展図録第22冊)の刊行

「津山松平藩町奉行日記(十六)」

(博物館紀要第22号)の刊行

■普及活動

「博物館だより」の発行

No.54 4月1日 No.55 7月1日
No.56 10月1日 No.57 1月1日

博物館〈友の会〉
～会員募集!!～

HAKUBSUKAN
TOMO-NO-KAI



目的

郷土の歴史と文化に対する理解と関心を深めてもらい、互いに情報を交換し、同好の仲間を増やすことを目的とします。

特典

- 津山郷土博物館の常設展・特別展・企画展が無料で観覧できます。
- 博物館主催の「文化財めぐり」(年4回開催)に参加できます。
- 「博物館だより」(年4回発行)や講座など、博物館に関する情報をお知らせします。
- 津山洋学資料館の入館料が割引されます。

会員になるには

- 資格／どなたでも
- 会費／一般1,000円、中学生以下500円
- 申込方法／現金を添えて直接博物館窓口で。
- 申込期限／なし (申込用紙あります)

博物館入館案内

- 開館時間：午前9:00～午後5:00
- 休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- 入館料：一般 210円(160円)
高校・大学生 150円(120円)
中学生以下 無料

※()は30人以上の団体



友の会行事「文化財めぐり」

information

博物館からの
お知らせ

～津山郷土博物館にて発売中～

「津山松平藩町奉行日記十五」

(寛政9年)(写真は十四)

刊行 頒価 900円

津山郷土博物館窓口でお求めください。



博物館だより No.54 平成19年4月1日

編集・発行：津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 ☎(0868)23-9874
E-mail : tsu-haku@tvt.ne.jp

印刷：株式会社 津山朝日新聞社